

特集にあたって

看護理論というコンパスをたよりに こどものこえを実践につなげよう

こどもが育つ生活や社会、自然を含めたすべての環境や、こどもを育む大人たちの思考や価値観は多様化し、目まぐるしく変化を続けています。こどものケアを行う看護師もさまざま環境で働き、多様な課題に向き合いつつ多重課題に追われながら看護業務を行っているといっても過言ではありません。どのような環境であっても私たち看護師は、こどもの最善の利益を追求し、こどもの幸せを願いながらケアを行っています。

こどもの最善の利益を考える際、看護理論を用いて考えてみると、「なるほど!」「そうだったのか!」という新たなひらめきや気づきがあります。このように学習の成立に伴った快と驚きの情動反応を「アハ体験」といいます¹⁾。筆者らは、看護理論を通して看護師がこのようなアハ体験を体感することによって、こどもの最善の利益につながる看護の可能性が広がるのではないかと考えています。

看護理論は「ムズカシイ!」という思いが先行しがちです。しかし、看護理論を通してこどもと接する日常の何気ない場面を振り返ってみると、実はそこには実践している私たち自身も気づいていなかったたくさんの看護があることに気づくことができます。

例えば、「採血をいやがり、泣きじゃくるこどもと“一緒にがんばれる作戦会議がしたいな”と話している看護師たち」という場面を思い浮かべてみてください。こどもは“いや”という感情をもちながらも看護師の言葉や落ち着いた雰囲気の影響され、気持ちが変わっていきます。それはロジャーズの看護理論における「環境との相互作用で常に変化する人間」を表しているかもしれません。また、こどもが「泣ける」「いやがれる」という意思表示する力をとらえて、その力をこどもが発揮できるよう支援する視点はオレムのセルフケア理論でしょう。さらに、「作戦会議」でこ

もと一緒に目標を決めるのはキングの目標設定理論でもあります。そして、「作戦会議」のなかで、採血中にこどもが普段から馴染みのあるものやキャラクターと過ごすことを提案したとしたら、こどもの文化を大事にするレイニガーの文化ケア理論でもあるでしょう。

このように、目の前の出来事をいつもとは違う視点で見つめ直すことで、迷い道に入っているケアの道標となってくれるのが看護理論といえます。看護理論を学ぶことで、「こどもに今何か起こっているのか?」「解決の糸口をつかむために、どのように考えたらよいのか?」といった、こどもを取りまく現象の全体像や課題の本質をより豊かに理解することができます。

筒井²⁾は、看護理論を「看護実践を記述し、説明し、結果を予測するのに役立つ、よりよい実践のためにある」と説明しています。こどもにかかわっているすべての看護師に看護理論を実践のなかで活用することを勧めたいと考え、本特集を企画しました。本特集を通して看護師が看護理論を学び、考えることで、「なるほど!」「そうだったのか!」というアハ体験を体感し、こどもの最善の利益をまもるケアに活かしてほしいと願っています。

【文献】

- 1) 牧野健一：ひらめきに付随する「アハ体験」とドパミンの神経相関。ファルマシア 54：1166, 2018.
- 2) 筒井真優美：看護理論；看護理論21の理解と実践への応用。改訂第3版，南江堂，東京，2019.

仁宮真紀 Ninomiya Maki

旭川荘療育・医療センター看護部教育師長／小児看護専門看護師

鈴木千琴 Suzuki Chikoto

元済生会横浜市東部病院小児プライマリケア認定看護師教育課程／小児看護専門看護師